

赤將軍塚古墳

— 保存整備事業第1年次発掘調査概報 —

1981

信州大学附属図書館



<10>0025000266

長野県更埴市教育委員会



序

国指定史跡「森将軍塚古墳」を、永久に破壊から守らねばならない、との市民の良識ある要望に端を発した「森将軍塚古墳保存整備事業」は、更埴市はもとより、日本国、長野県、いわば倭国、科野国の人々にかかる未来への、歴史的責務としての事業であると考えている。

そのため國、県そして更埴市は、密接な協力体制をつくり、更に森将軍塚古墳整備委員会、そして森将軍塚古墳発掘調査団を組織した。

整備事業は5カ年計画とし、古代東國最古最大と評価されるこの古墳を、全面調査の上、四世紀に築造されたという当時の姿に復原し、この一帯を市民、県民、国民の皆さんの古代社会追体験の学習の場として活用する史跡公園となし、皆さんの憩いの場として利用されるよう計画している。

本年度は整備事業の第1年次として、来年度に計画されている古墳の全面調査のための基本資料を得るために予備調査が行われた。調査団長岩崎卓也筑波大学助教授を中心として、関係者の努力は敬服に値するものである。その努力によって新知見の素晴らしい成果があげられ、ここにいちはやく概報が刊行されることとは、関係者に深く敬意を表し、欣快とするところである。

昭和56年9月7日

更埴市長

後玉貞徳

目 次

例 言

I 整備計画の概要	1	1. 本書は長野県更埴市森将軍塚古墳の整備事業計画（5年計画）の第1年次の発掘調査概報である。
II 森将軍塚古墳をとりまく環境	2	2. 本書は調査員が分担して執筆した。執筆者名は本文に明記した。
III 墳丘の概要	3	3. 写真は主として矢島宏雄、土屋 稔、森田久男が、また実測図の整理は森田久男、矢島宏雄が行った。
IV 調査の経過	4	4. 出土遺物の整理は森田久男、矢島宏雄を中心に進行中である。
1. 墳丘調査について		5. 出土遺物、実測図、写真等の資料は、すべて更埴市教育委員会に保管されている。
2. 地質構造について		6. 昭和40、42、43年度に行われた調査の全資料も、更埴市教育委員会に保管されている。
V 調査	6	
1. 前方部の調査	11	
2. くびれ部の調査	13	
3. 後円部の調査		
VI 墓輪について	14	
VII 組合式箱形石棺について	15	
VIII 調査区の保存処置	17	
IX まとめ		

I 整備計画の概要

史跡森将軍塚古墳は、昭和45年頃急激に進む周辺での採石により崩壊するところを広範な市民による保存運動並びに、関係土地所有者、採石業者をはじめ関係者の協力、努力により昭和46年3月16日国史跡として永く保存されることになり今日に至った。近年こうした経緯のある本古墳の整備、公開を望む市民の声が高まり、まず昭和55年2月29日更埴市が管理団体の指定を受け整備、公開して行くことになった。

計画策定にあたっては、文化庁、奈良国立文化財研究所、長野県教育委員会の指導をいただき各分野からの専門家による整備委員会を設け基本構想をまとめた。本事業は、国庫並びに県費補助事業として昭和56年度から5ヶ年計画で、古墳を発掘調査に基づき古墳築造当時の姿に正しく復原整備を行い、併せて便益施設、安全施設等の設置を含め周辺環境整備を行い、史跡公園として広く市民に公開するものである。

第1年度（昭和56年度）予備発掘調査及び、史跡全域の地形測量の実施。史跡内私有地の公有化。

第2年度（昭和57年度）古墳本体の全面発掘調査の実施。

第3・4年度（昭和58・59年度）古墳本体の復原整備工事及び、周辺円墳数基の発掘調査の実施。

第5年度（昭和60年度）周辺円墳の整備工事、施設の設置及び、周辺環境整備工事の実施。

史跡森将軍塚古墳整備委員会

団長 岩崎 卓也 筑波大学助教授

指導 文化 庁 高瀬要一文部技官

副團長 森 鳴 稔 上山田小学校教諭

長野県教育委員会

調査主任 松浦 寿一郎 横浜国立大学講師

委員 保存 安原啓示 奈良国立文化財研究所

調査員 森田 久男 小山市史編纂調査員

整備

近藤 美夫 東海大学講師

考古 木下正史 奈良国立文化財研究所

矢島 宏雄 市教育委員会社会教育係

考古 第二研究室長

調査指揮 安原 啓示 奈良国立文化財研究所

考古 岩崎卓也 筑波大学助教授

保存工学研究室長

考古 森鶴 稔 上山田小学校教諭

考古 第二調査室長

防災 斎藤 豊 信州大学助教授

立木 修 奈良国立文化財研究所

地質 斎藤 豊 信州大学助教授

考古 第三調査室

昭和56年度史跡森将軍塚古墳発掘調査団

小林 秀夫 長野県教育委員会専門主事

顧問 八幡 一郎 前上智大学教授

土屋 積 彦

児玉 太郎 市文化財保護審議会委員長

開根 孝夫 東海大学助教授

米山 一政 リー 委員

事務局 更埴市教育委員会社会教育課



森将軍塚古墳遠景 北側より（昭和55年6月）

II 森将军塚古墳をとりまく環境

森将军塚古墳が、善光寺平における盟主的古墳であることについては、定着し異論のないところである。その築造時期は四世紀後半とされたこともまた同様である。それは東国における最も古い古墳の一つであることをも示し、すでに調査された内容については、充分に評価されているところである。そうした森将军塚古墳も歴史的記念築造物として存在する時間的、空間的産物であることは言うまでもない。屋代・雨宮自然堤防面に展開する大集落遺跡群に対し、その後背湿地の生産面は、更埴条里遺構として知られる広大な安定した水田農耕地域である。これは、弥生時代から続く豊饒な生産面であり、その余剰生産力の大きさが、森将军塚古墳の存在をささえているとみることができる。

対岸の山頂に於る川柳将军塚古墳もまったく同様な構造をもつ歴史的空间と理解される。首長の歴史的展開としてそれは把握できるが、倉科、土口、中郷、越将軍塚古墳など、かならずこうした集落遺跡群と生産面との関連で位置づいていることが明らかである。

千曲川自然堤防上の集落地域、その後背湿地の生産地域、対応する山頂の首長墳墓地域と、明確な歴史的空间の占有として構造的であることは、極めて図式的に整った地域であると評価できる。集落地域は弥生時代から今日まで続き、生産地域は今日では余地がない程に整備され、墳墓地域は山間、山麓へと群集化の方向へ展開して行くのが、森将军塚古墳をとりまく環境のあり方である。

(森崎 稔)



1. 森将军塚古墳 2. 有明山将军塚古墳 3. 舟科将军塚古墳 4. 土口将军塚古墳
5. 川柳将军塚古墳 6. 中郷神社古墳 7. 越将軍塚古墳
A. 畠代遺跡群 B. 雨宮遺跡群 C. 土口遺跡群 D. 塩ノ井遺跡群
E. 塩峰遺跡群 F. 八幡遺跡群

III 墳丘の概要

全長98m、前方部幅30m、同部高5m、後円部径45m、同部高9mの前方後円墳である。

古墳は大穴山の短小な屈折する尾根状の分歧点に築かれ、特徴ある古墳の外形を構成している。その第1点は、古墳の中軸線が前方部と、後円部とでは若干のずれがあること。第2点は、後円部が幅に比して長く、梢円形に近い形をとり、また今後の調査により明らかにされようが、後円部後方に台形のプランを持つ造り出し状のものが付設され、前回の調査では同部からは、朝顔形埴輪の出土が多く、同裾部からは穿孔のある埴形土器、杓子形土器など特異な土器も発見され、本古墳の特色となっている。第3点は、前方部前面はいわゆる「丘尾切断」によって形成され、墳丘基部の石垣は、岩盤直上から垂直に構築され、かなり整美な墳丘構成となることが予想される。第4点は、原地形を利用しながらも、特に後円部を中心に大形の角礫、粘土を用いて墳丘構築を行なっている。第5点は、確認されているだけでも、前方部、くびれ部の裾部、前方部墳丘上などに8基の組合式箱形石棺、埴輪円筒棺、横穴式石室など主体部以外に墳丘上と、裾部に多くの埋葬施設を付設していることである。今後の調査によってこれらの諸点は明らかにされるであろう。

(小林秀夫)

森狩軍塚古墳遠景 南側より（昭和4年 森本六郎撮影）

IV 調査の経過

1 調査日誌より

史跡森将军塚古墳は、これまでに昭和40年から3次にわたって、発掘調査が行なわれてきた。(註) 本年度は、5ヶ年事業の初年度にあたり古墳の規模、保存状態を調べる予備発掘調査を実施し、また史跡の地形測量図を作成し、来年度計画の古墳全面発掘調査、保存整備工事の基本資料とした。

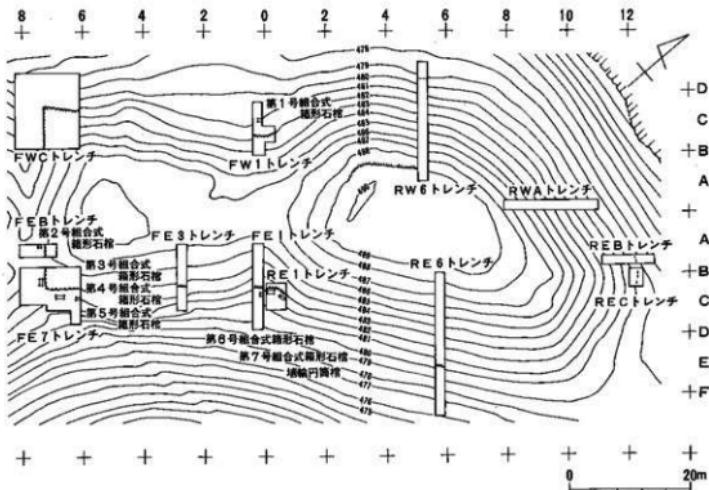
史跡全域の地形測量は、奈良国立文化財研究所測量研究室伊東太作技官の指導を得て、業者委託し7月から作業が行われた。地形図は、国家座標系を盛り込み、史跡内に2点の永久埋設杭による基準点を設け、コンターノンム、縮小比100分のものを作成した。

発掘調査は、7月23日から8月15日までの24日間行われた。初日には、地元関係者、調査団の出席をいただき本事業及び今次発掘調査の開始式が現地で行われた。調査にあたって、墳丘の主軸を中心とし前方部と、後円部に二分し、さらに東西に分け、5mごとのメッシュで区分し数字とアルファベットを付して調査区を呼称した。主軸は、真北よりN-42°-Eを示している。調査は、墳丘裾部の確認に重点をおき、前方部5ヶ所、くびれ部3ヶ所、後円部4ヶ所合計12ヶ所のトレンチを設けた。調査後半の8月9日には、調査成果を広く市民に見ていただくべく現地説明会を開催し、120名の参加を得た。炎天下、急斜面での作業の上に、根と石の除去に思いのほか難航した。また、調査体制、人員の不足もあり、予定より遅れ8月15日に発掘調査は終了した。

遺構の保護は、8月18日から土のう積み、シート張りを行った。8月29日には、すべての現場における作業が完了し、5ヶ年事業の初年度予備発掘調査は、多大な成果を上げ終了した。

実働日数36日 調査回数延べ150人 作業員延べ493人 調査面積430m² (矢島宏雄)

(註)『長野県森将军塚古墳』更地市教育委員会1973年



森将军塚古墳発掘区全図

2 森将军塚尾根の地質構造

(1)古墳の位置する尾根部は海拔486.8~490.0mの平坦地形をなしているが、これは旧千曲川の側方侵食により形成された段丘面である。ちなみに後背山地との鞍部(FEBトレンチの位置)には黒土混りの表土下にチャートの円錐を含む段丘砂レキ層(30~80cm)がみられる。

(2)尾根部をつくる別所層(中期中新世)は硬質な黒色泥岩からなり走向はN30°Eで、NWへ30°~35°傾く。したがって、尾根部の南東側の斜面は約30°の傾斜をなすが、北西側は約26°と南東側よりゆるい傾斜をしめす。

(3)流れ盤は崩壊しやすい。尾根部の北側、旧採石場の崖の断面は下図のとおりで主にクリープによって緩斜面上を徐々に下方に運ばれ、斜面下部に堆積して生じた Colluvial deposits(崩壊堆積物)が別所層をおおつて発達している。その厚さは3~4mある。さらにその上を不整合に崖錐堆積物がかさなる。この崖錐堆積物は後背山地から土石流のような形で押し出して山麓に堆積したものである。

(4)別所層は石英斑岩(有明山)により貫ぬかれており、また石英安山岩の熔岩を1枚はさむ。崖錐堆積物は主にこれらの大小の角礫からなる。

(5)地質の種類が地表面面に対して平行またはそれに近い関係にあること。受け盤の対面。

(斎藤 豊)



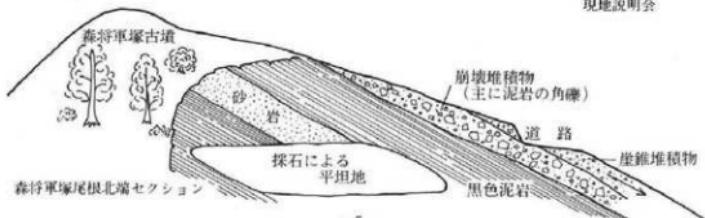
FEB トレンチの調査



REI トレンチの調査



現地説明会



V 調査

1 前方部の調査

(1) F E 7 トレンチ

前方部コーナー付近の南斜面に、最初幅2m、長さ10mの墳丘裾部確認のためのトレンチを設定したが、後に前方部東側のコーナー追求のため拡張し、幅6m、長さ10mの調査区となった。

調査前の状況は、泥岩細礫を主とする黄褐色の山土層が表面を形成し、ところどころに安山岩質の角礫があらわれており、葺石の存在を思わせた。腐食土および表層を除くと、墳籠線上に葺石および崩壊したと思われる角礫があり、その浮いている角礫を取り除くと、墳籠を画する石垣列があらわれ、外側に山土をベースとする平坦面が確認された。この平坦面は石垣列から1.5m~2m幅を持ちその先是自然の傾斜面となった。

調査の結果は、墳丘の縁線である石垣列は、前方部前面3m、前方部側面5m、前方部東側コーナーを確認した。石垣列はほぼ直交し、コーナーはゆるやかにカーブし、隅丸状である。石垣列は30~70cmの大形の角礫を基底に、角礫の平坦面を揃えた4~5段の小口積みで、高さ50~70cmである。基底は後円部の基点より-7.5m、前方部西側との差は約-1.5mである。

本調査区では、墳籠外縁部である平坦面上に、小形組合式箱形石棺が前方部に1基、側面部に2基検出された。墳丘基部から0.2~1.5m離れて、墳丘縁線に平行して検出された。石棺は泥岩細礫を主体とする山土層上に構築されている。

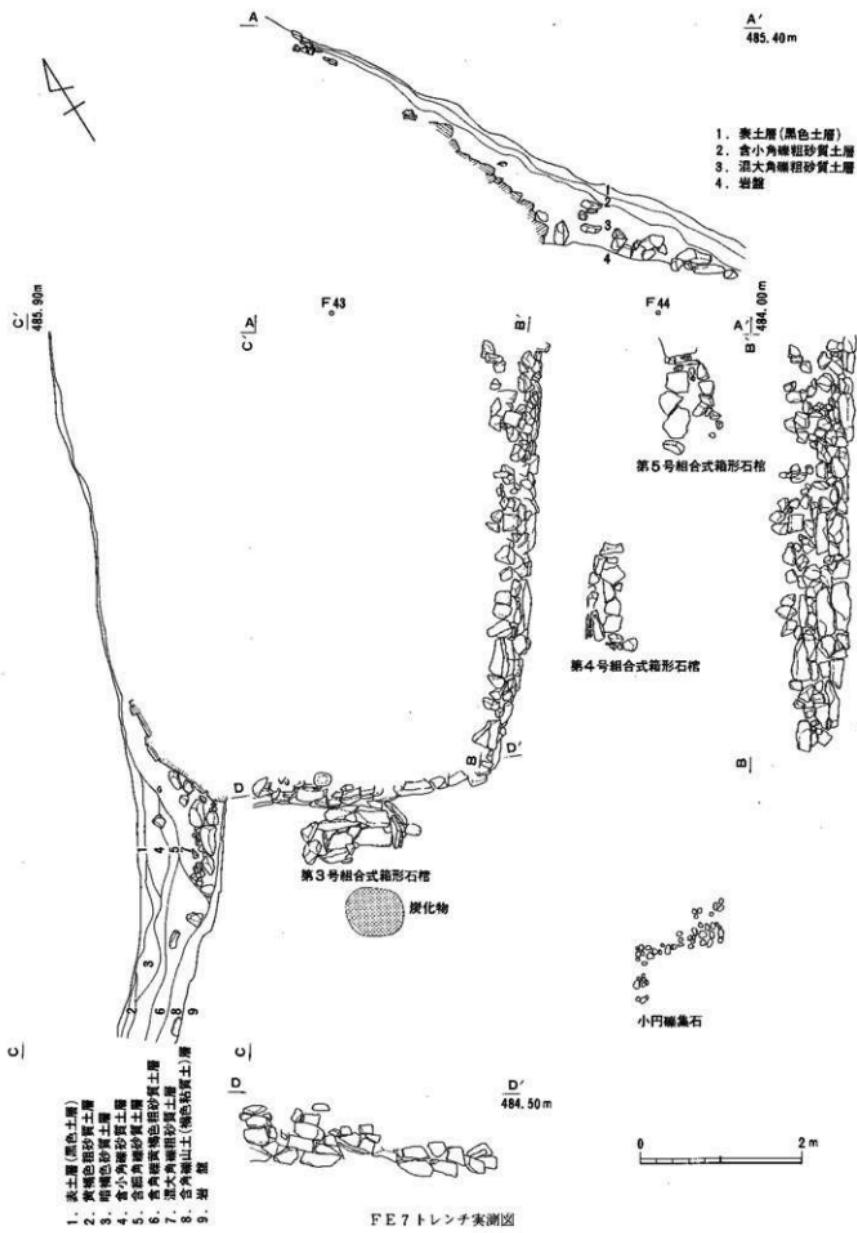
円筒埴輪および形象埴輪片は、平面上に堆積する角礫層中および平坦面直上から多量に出土した。原位置を保っていたと思われる埴輪片は確認できなかった。

前方部前面の第3号石棺南側の平坦面から、石棺構築面と同レベルで、直径80cmほどに炭化物が集中して検出された。他に、調査区南東側コーナー付近の表土下、山土層上面に、5cmほどの河原石による集石が認められた。両者ともに今回の調査では、その性格は明らかにしえないが、今後の調査の進行によって判明できるものと思われる。

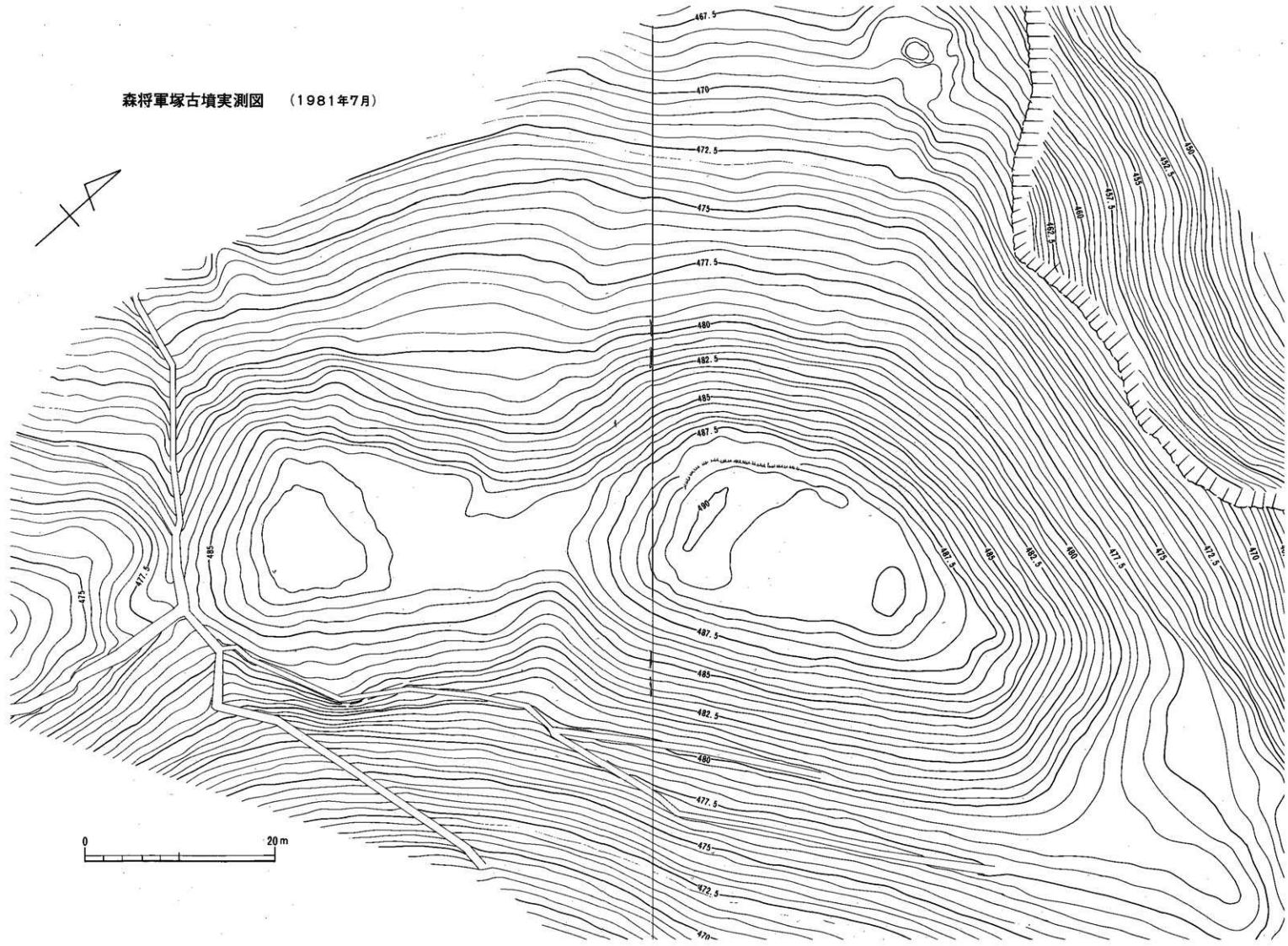
(青木一男)



墳丘前方部 F E 7 トレンチ南側から



森将军塚古墳実測図 (1981年7月)



(2) FEBトレンチ

前方部前面の東側の墳丘基部の確認を目的とした、幅2m、長さ6mのトレンチである。墳丘葺石と、石垣状の墳丘基部は、第V層の角礫層を取り除くと、長方形の50cm大の角柱状の石を横積みしている状況が確かめられた。墳丘基部から1.3m前方に、組合式箱形石棺が、側壁部を岩盤上につけ、



FEBトレンチ

第IV層黒色土層内に構築されていたが、断面での観察のみからすれば、すでに破壊されているものと思われる。他で出土している石棺と同様に小形のもので石棺内から土師器片が出土している。第IV層黒色土層は、墳丘部表層を形成していたと考えられる第V層より前方に堆積しており、組合式箱形石棺を中心として規模な墳丘を構成していた可能性が考えられる。墳丘基部は、3mほど前から尾根状の岩盤が削られテラスを造り、直接岩盤上に構築されたものと思われる。

(小林秀夫)

(3) FW7トレンチ

このトレンチは、前方部西側のコーナーの確認を目的としたものである。裾部石垣列は非常にくずれが激しく、ほぼ当初の形をとどめていると思われる石組は、前方部前面で、ごくわずか検出されたのみであるが、おそらく原位置をとどめていると思われる根石列や、テラス部分と思われる平坦面を検出してゆくことによりほぼ直角に交わっていたと思われるコーナーを確認することができた。テラス部分であると思われる平坦面は、前方部前面では、岩盤を削平して、おおよその形をととのえ、その上に薄く山土を置いて形成していると思われ、円筒埴輪片がかなり集中して出土している。西側側面では、かなり石のくずれが激しく、はっきりとは確認できないが、地山を整形(削平)して平坦面をつくっていると思われ、円筒埴輪片も散乱していた。

西側側面の平坦面より下へ傾く斜面では、墳頂から-11m付近で張石状の配石が検出された。これはそのまま、後円部方向へ続くものと思われるがくわしいことは次回の調査を待ちたい。またこのトレンチでは、前方部の反対側にあたるFE7トレンチや、FEBトレンチで検出された小形組合式箱形石棺は、検出されなかった。

(千野 浩)

FW7トレンチ

2 くびれ部の調査

(1) F E 1 トレンチ

東側のくびれ部を明らかとする目的で、幅2m、長さ14mのトレンチを設定した。埴籠近くには崩れ落ちた葺石が厚く堆積し、調査はその人頭大の角礫を取り除くことから始まり円礫混りの山土（褐色粘土）で固めた平坦面を検出し、さらに埴籠を画する石垣列を確認したが、くびれ部の埴籠線は明らかにされなかった。平坦面は約3m幅で、その先は自然の傾斜面となっている。石垣列から外方に約60cmの平坦面上に、小形組合式箱形石棺（第6号）が発見された。遺物は平坦面直上に多量の埴輪片と、若干の土器片が出土しているが、原位置を示すものではない。なお本トレンチとF E 7 トレンチの間にF E 3 トレンチを設定し、埴籠線の確認をしたが、崩落が激しく充分な成果はなかった。

(2) R E 1 トレンチ

F E 1 トレンチでは、くびれ部の状況が明確にできなかったので、後円部より幅3.5m、長さ4mのトレンチを設定した。崩落した角礫の状態は、F E 1 トレンチと同様で、この角礫を除くと石垣列とそれに続く、くびれ部が発見された。平坦面もF E 1 トレンチの結果と同様であったが、肩口部には意識的に小角礫を埋めこんだ状況が観察された。くびれ部と後円部を結ぶ曲線は、疊圧によって、押し出され充分な形状は明らかでない。

石垣列から外方へ約30cmで、石垣に平行して小形組合式箱形石棺（第7号）が、くびれ部石垣に沿って埴輪円筒棺が検出されている。

（森田久男）



F E 1 トレンチ



R E 1 トレンチ

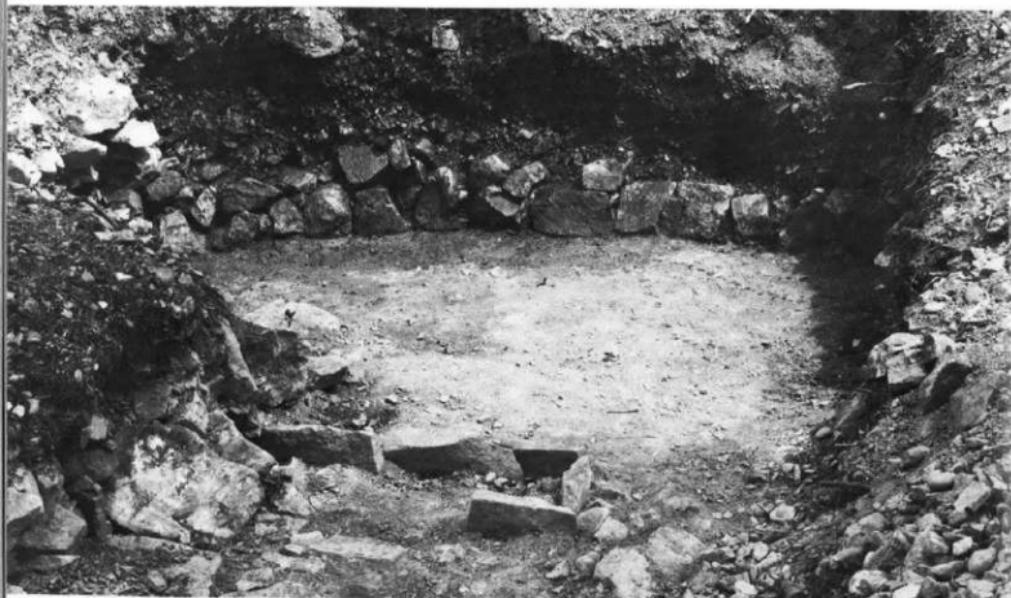
(3) FW 1トレンチ

本トレンチは西側くびれ部を明らかとすることを目的とした。この位置には過去に調査されている横穴式石室を主体とする小円墳が存在し、この石室とくびれ部分の関係を明らかにするため再度石室の全形を露出し、あわせて不充分であった溝道部前面も精査した。

その結果、FW 1トレンチでは墳丘外周の石垣を確認し、北への拡張区においてくびれ部分を明らかにできた。石垣は原位置を保つが、わずかに1、2段を残すのみである。小円墳のマウンドと考えられる大角礫のひろがりがくびれ付近にまで達しており、あるいは石垣上段部の角礫がこれに転用されたためかもしれない。石垣直下からその前面1m程の範囲では、石垣に沿って帯状に、円筒および朝顔形埴輪片がほとんど散詰められたような状態で出土しているが、基部などで原位置を保つものではなく、樹立位置、方法などを明確には指摘できない。石垣の後円部への方向は現状の墳丘とほぼ一致しており、後円部がこの部分においても正円とはならないことを推測させる。ただし、小円墳の保存との関係から、これ以上の調査は今回行えなかったので細部は次年度の課題である。

石垣より約2m離れた位置に組合式箱形石棺を検出している。これは円墳のマウンドと思われる大角礫群の末端ちかくで、その角礫下から見出され、今回、全形を露出させておらず、棺内も未掘のため明らかでないが、幅35cm、長95cm以上となる。この上面に円墳に伴なうと思われる須恵器提瓶、壺などがあった。横穴式石室からは、溝道前面より金環1、刀子1、須恵器片、石室床石下より金環1を見出している。なお、奥壁の石積の下に石室構築以前にあったと思われる埴輪片を大量に見出しており、小円墳築造時の状況をうかがわせて興味深い。

(土屋 積)



FW 1 トレンチ

3 後円部の調査

後円部の調査は、①墳丘裾部を捉えその基底を確定すること、②後円部張り出しを裾部において確認し、後円部との関係に見通しをもつこと等の目的をもって、4本のトレンチを設定した。

(1) RW 6 トレンチ

R 5 杭を基点として後円部西側に設定したトレンチである。墳丘全面には既に角礫が露出しているが、二次的に移動したものである。本来は、墳丘地山上の人頭大角礫層が墳丘を構成したであろうが、旧状は甚しく損なわれ本来の増丘面は確定し難い。しかし、地山の整形状況よりみると標高480.1mと478.5mの地点で地山削土の変換が観察される。478.5mを墳丘基底と判定した。この外縁には若干の幅をもった石敷帯が予測された。

(2) RE 6 トレンチ

R 6 杭より後円部東側に設定した。西側とはかなり様相を異にする。標高480.1m以上では大角礫の乱積が認められた。しかも基底には面を整えた根石が並び裾部を形成している。外側には幅85cmの平坦部をもち、以下傾斜面となるが、標高478.2mから479.5mの間には墳丘に平行して挙大の角礫の石敷帯が認められた。

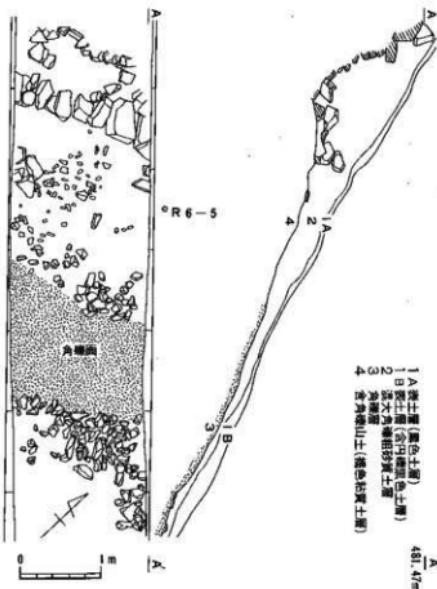
(3) RWA トレンチ

後円部軸上に設定したトレンチである。ここでも積石は崩落が著しく旧状を留めない。481.0mでは地山削土に変化が認められ段部とみなしうる。標高478.9mでは大角礫の配列と若干の石積が観察され裾部と考えられるが、本来の構築とはい難い。

(4) REC トレンチ

後円部張り出し部確認のためのトレンチである。拡張部を設定しながら西側コーナーの検出につとめる。石積の状況は明確ではないが、標高478.4mで大角礫の配列が認められ、裾部とすることができる。なお481.2mでは段部をなす状況が観察された。

(関根孝夫)



RE 6 トレンチ 実測図

VI 塗輪について

各トレンチから多量に出土したが、塗丘根部の石垣外縁に堆積する角礫間や、平坦面直上から発見された。そのいずれもが小破片であり、塗輪樹立の痕跡を示す状態ではなかった。円筒、朝顔形、形象塗輪、塗輪円筒棺が出土しているが、現在整理作業中であり、今回はそれらの何点かを紹介するにとどめる。

1 円筒塗輪

口唇部 口唇部から最上段の凸帯まで接続される破片は今のところ見られないが、2・3のように直立するものが多い。1は外反し朝顔形塗輪の可能性がある。

外面・内面の調整 外面は縦位の刷毛目で、2cmあたり10本前後の単位を原則としているが、斜位の刷毛目、一部に横位に近い例(5)もある。凸帯部分を接合部としている4~6は、凸帯を境として刷毛目原体が異なっている。3・8・9は同一個体と考えられるが、縦刷毛目調整後、横、斜め、波状の沈文様を施している。内面は横位の刷毛目、ナデ調整を原則としているが、外面と同様に凸帯部分を接合部としているために、接合部を境として、上は横位の刷毛目、下はナデ調整のもの(5)と、その逆と思われるもの(6)がある。6には凸帯接合部の内面に指圧痕がある。

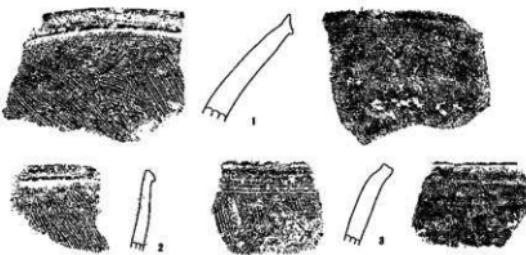
凸帯 凸帯は貼り付け凸帯と、特異な擬口縁をなす凸帯(6)がある。凸帯の断面は高さ2cm、幅1cm前後と突出しの強いものが多い。

透孔 三角形を呈するものと、方形状と考えられるものとがあるが、前者には三辺を直線で三角形とする例と、一辺が直線で他の二辺は曲線で構成されるもの(4~7)がある。4~6は直線部分、7は曲線部分の破片と思われる。4には透孔のやや上に、横方向の一条の沈線が認められる。



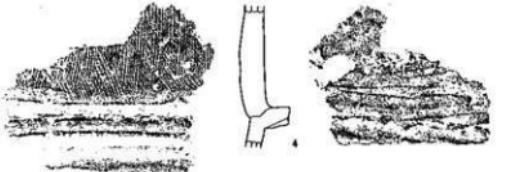
塗輪円筒棺の出土状況

色調、胎土、焼成 色調は褐色と暗茶褐色に大別されるが、1、3～9の外面に塗丹が認められる。黒斑は1～3、8～10の外面に部分的に3、8、9には内面全体に認められるものもある。胎土は砂粒が多く、長石、石英の混入も多い。焼成はバラつきがあり、焼成は良くない。



2 形象埴輪

前方部のレンチから数10点出土しているが、小破片で器形が明確になった例はないが、圓形を含む角形のものが含まれ、今後の整理の結果によっては形態も明らかになろう。

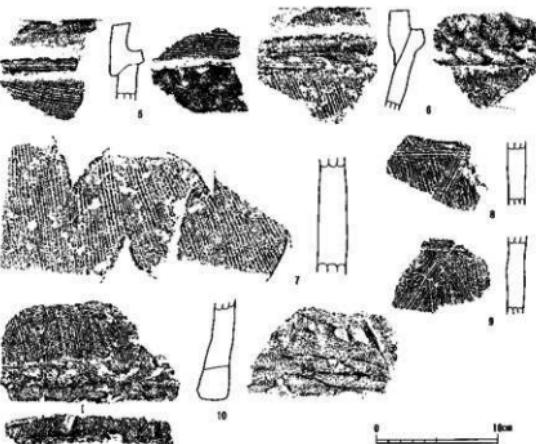


3 塩輪円筒棺

棺の全長約2m、朝顔形埴輪の脛部と、円筒埴輪を組み合わせたもので、埴丘平坦面上に、人頭大の角櫛を敷き棺床とし、埴輪棺を載せる方式である。埴輪円筒棺は、長野県下では本古墳の対岸に位置する長野市川柳將軍塚古墳の前方部埴輪に発見された例に統いて2例目である。組合式箱形石棺との関係や、川柳將軍塚古墳例との比較が必要となろう。

副葬品は発見されていない。

(森田久男)



円筒埴輪片拓影

VII 組合式箱形石棺について

このたびの予備調査において、特に注目されたのは、本墳の裾部平坦面に検出された、極めて小形の組合式箱形石棺の存在であろう。予備調査の性格上、限定された面積がその対象となったが、くびれ部より前方部にかけて実に7基を確認することとなった。しかもその構造プランは、埴丘掘縁に対し、石棺長軸が例外なく平行するようになっていた。それはあたかも主墳に対して寄り添うかのようにであった。昭和42年度調査の際、前方部埴丘上にも1基検出されているので計8基である。

検出された組合式箱形石棺はいずれも小形である。その規模は長さ約1m、幅約0.3m程度のもの

という齊一性が認められた。その構造は、4～5枚の平石を底石とし、側壁は2～5枚の平石を立て妻側壁にはほぼ三角形の平石をもたせかけ、天井石の構造については明らかにならないものがほとんどであったが、RE1、FE1トレーナーの2例からすれば、屋根形をなしていたのではないかと見ることが可能である。妻側壁に三角形の平石を用いたものが多いこともこの理解をたすけている。

本墳に附属すると思われる小形の箱形石棺の墳丘とその築造時期についてみておきたい。まず墳丘の存在については、明確さを欠いていたのが現状であった。それは、墳丘裾部に近く構築されていた箱形石棺は、その墳丘と思われる礫石群と、主墳丘の葺石等の崩落による礫石群との堆積の間における層序の状況に著しい変化がなかったためである。しかし、崩落による自然堆積による礫石群と、人工的な小墳丘構築のための積み上げとの間には、相違があったことはたしかであった。それらを結合すると、本墳の裾部で検出された組合式箱形石棺は、やや大きめの礫石で、直径2m、高さ0.5m程のあたかも積石塚様の墳丘によって封ぜられていたと理解できた。またそれらの築造時期であるが、本墳裾部の平坦面を切り込んで造られているものや、平坦面に自然堆積と思われる土砂の堆積が行われた後に行われたものや、明らかに埴輪の破壊散乱上に底石をのせて築造されているものなどがあるて、一時期一勢に造られたものであるかどうかには、問題点が残されている。

この種の箱形石棺について若干の類例を求めておきたい。今日までのところ最も共通点の見出されるのは、長野市吉古墳群の第31、33号古墳の例である。森将軍塚古墳例よりやや大形であるが、側壁の構造及び妻側壁の三角平石の構造等、類似点が多い。また小林秀夫「合掌形石室の諸問題」(『中部高地の考古学』1978)が指摘する大室第2類形式期の大室112,221,224号墳などに類例が求めることができる。こうした例は、更埴市杉山古墳群にも同様例として数基、更に長野市信更町の小山田池周辺にも数基存在する。箱形石棺としては森2号墳をはじめ、長野市松代町長礼山古墳、信州新町武布佐古墳などがある。武布佐古墳では、平石一枚をのせた底平石をもつ小箱形石棺が附属していたもの注意される。こうしてみると屋根形天井石を持つかどうかはひとまず置くとしても、組合式箱形石棺の小形ものは、森将軍塚古墳の周辺地域にかなりの広がりをもって存在していると言える。

裾部に集中するという性格については、更に今後の調査にまつことにしたい。

(森崎 稔)



第3号組合式箱形石棺



第7号組合式箱形石棺

VIII 調査区の保存処置

当市は、南北に細長い本州の中央部に位置し、また太平洋岸と日本海岸との間にあたり、気候の上では「中央高地気候」と呼ばれる寡雨乾燥の地域である。冬期には、20cm~30cmの積雪があり、また平均最低気温-1.2度(1月)を測る。このため、発掘調査後保存整備工事までに1~2回冬を越さなければならない。特に冬期間の凍土による遺構の損傷をどう防ぐかが大きな課題となつた。

検討の結果、ポリエチレン製の土のう袋に堀り上げた土を入れ積み上げることにした。土の量を変えることによって、複雑な遺構面の凹凸に合せて積むことが出来、また作業も能率的で有効な方法であった。全調査区(430m²)で5,000袋要し、さらにその上に防水用ビニールシートで覆い来たる冬に備えた。

(矢島宏雄)

IXまとめ

今回の発掘調査は、五ヶ年計画による森将軍塚古墳保存整備事業の一環をなすものであった。その第1年次にあたる今年は、墳丘の遺存度とりわけ埴輪のそれに探りを入れることを主眼とした。古墳の範囲確定が当面の急務だからである。調査の結果、墳丘の東側はよく残っているのに、西側の荒廃が目についた。これは後円部においてとくに著しいようである。

前方部前面の基礎は、自然地形に影響されて、その東側と西側との間におよそ2mの高度差があつた。この高度差のまま古墳の東側と西側が作りだされていたが、どの部分で両者の食い違いを是正したのかは、来年度に明らかにされよう。それはともかく、今次調査で、前方部前端幅約30m、くびれ部幅約26mを確定した。前方部の開きが弱いことがわかる。だが、指摘されているように、この古墳の平面形は通有の前方後円墳のそれではない。さりとて、前方後方墳あるいは双方中円墳といいきれるものでもない。これの確定もまた来年度以降に持ちこされてしまった。

墳丘は丘尾を切断し、自然の山丘を最大限に利用して形づくり、その表面に石を葺いたものである。前方部に中段はないらしいが、後円部には2段以上の段築がありそうで、これの探査は来年度に計画している。

今次調査によって出土した埴輪は、前回の調査資料とほぼ同じだが、前方部前面付近に圓形を含む角形のもののが多かった。特異な透し孔をもち、また屋根の破片と思われるものも見当らないから、家とは区別されよう。埴輪といえば、埴輪からも相当量の破片を得たが、原位置を保つものはない。したがって、ここの埴輪列も、その有無を含めて今後明らかにしなければならない課題である。

今次調査で、とくに注目をあつめたのが、古墳の裾から発見された埋葬遺構群だった。その多くは古墳築造後につくられたものだが、配列状態から見て、古墳との関係を無視するわけにいかない。石棺が小形だからといって、いちがいに小児埋葬を想定することはできない。これと同大の石棺から身長160cmをこえる成人骨が出土した例もあるからである。また、前方部頂からも、今後同様の施設がかなり発見されることになろう。それらをも含めて、その性格・年代等を確定していく必要がある。なお、埴輪円筒棺は、川柳將軍塚古墳に次ぐ県下2例目の発見である。調査の成果、そして発見された諸施設を、保存計画にどのようにとりこんでいくのか、今後真剣に考えねばなるまい。更埴市民の、いや日本人の歴史追体験の場を整備するための調査は始まったばかりである。よりよい場をつくるには、英知をあつめねばならない。多くの方がたの御協力と御助言とを期待してやまない。

(岩崎卓也)



前方部の保存処置

森将軍塚古墳 ——保存整備事業第1年次発掘調査概報——

発行日 昭和56年10月18日 編集 森将軍塚古墳発掘調査団

発行 更埴市教育委員会 〒387 長野県更埴市杭瀬下762-2番地

印刷 ほおづき書籍(株) 〒380 長野市中越293柴崎第1ビル

092.162

No.65